

予科練平和記念館だより

平成22年2月開館

予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください



「願わくば、花のもとにて」と自らの最期の場所を桜の下に求めた西行法師の気持ちもわかるような、穏やかで、それでいてなぜか不思議に気持ちのはやる桜の季節がやってきました。

京都には古く平安の昔より「やすらい花」という行事があります。これは桜を散らす雨が降るころ疫病がはやるので、桜に少しでも長く咲いてもらって、その力で疫病を退けようと、赤い衣装をつけてたざんばら髪（髪）の「鬼」と呼ばれる人たちが鉦（かね）を叩きながらうたい踊るものです。「やすらい（安らかに）花や」と街中や神社をまわるその行事は、京都の三大奇祭の一つとしても知られています。

ウィルスの存在を知っている現代では、花よりも薬に頼ってしまいますが、それでも桜が花開く時には、いきとし生ける「いのち」というものが持っている力の強さを感じるがあります。もう少し、この薄紅色に彩られた日々が続くよう、「やすらい花や」とつぶやきたくなる今日このごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

今月号は、予科練習生の制服、七つボタンの誕生についてご紹介します。

●桜に、その翼

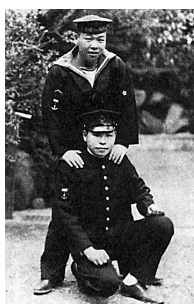
進学する学校を選ぶ際に制服のデザインは大きなポイントの一つですが、予科練習生（海軍飛行予科練習生・海軍の少年飛行兵）たちにとって制服は大きな関心事だったようです。

昭和5（1930）年に予科練習生の第一期生が入隊したときには、制服は写真の後ろの少年が着ているような、一般の海軍兵と同じ大きな襟のついた水兵服でした。しかし12年後の昭和17（1942）年11月に、前の少年が着ているような詰め襟にかわります。いわゆる予科練の代名詞といわれる七つボタンの制服ですが、なぜこのようになったのでしょうか。

もともと予科練は搭乗員を多く育てるためにつくられた制度でしたが、飛行機に関することばかりでなく幅広い教養を身につけるため、教育期間は3年と長く、卒業してから実際の操縦技術などを学ぶので、一人前の搭乗員になるまでには時間がかかりました。しかしより速く搭乗員を養成したいと考えた海軍は、昭和12（1937）年に、受験資格の学歴を上げた「甲種飛行予科練習生」コースを設立、普通学の授業を短縮して、

1年半で予科練過程を卒業させようとなりました。この募集にあたっては、海軍のエリート校である海軍兵学校に準ずるといふ点が強調されました。当時兵学校の制服は、簡略化のためボタンのないデザインに変わっていましたが、以前は七つボタンの詰め襟だったのです。

エリート校に近いと希望を持って入隊した甲種予科練習生たちでしたが、実際には一般の海軍兵と同じような処遇で、身につけたのも同じ水兵服でした。期待を裏切られた甲種予科練習生たちの不満はつゆ、ついには出身中学へ「予科練の実態は宣伝と違うので後輩を受験させないよう」との手紙を送る計画まで持ち上がりました。これは軍という組織の中では異例のことでしたが、最終的には、予科練習生の要望の中でも特に希望の多かった七つボタンの制服が認められることになりました。



▲七つボタンの水兵服と予科練の制服

桜に、襟には予科練を表す桜

に翼をあしらったウイングマークがついた制服にそでを通した彼らの誇りと喜びは、いかばかりだったかと思えます。

また、昭和18（1943）年に公開された映画『決戦の大空へ』と挿入歌『若鷲の歌』の大ヒットによって、予科練の知名度は上がり、実際には3年間だけだった七つボタンの制服は予科練の代名詞となって少年たちをひきつけ、大量の入隊者を生み出すきっかけになりました。

「花は桜木 人は武士」とのことばもあるように、散りざわが美しいとされる桜は軍人として、また当時の日本人としての美徳をよく表す花なのだと思います。それだけに、経験や考え方によってさまざまな感情を呼び起こすシンボリックさを持ち合わせています。

自分たちのマークとして、桜に翼を選んだ予科練習生たちのその後は、どのような人生だったのだろうか。そんなことを考えると、薄紅色の花は生き生きとした少年の頬に重なって見えてくるような気もします。散ってしまった花も、頑張つて咲いている花も、やすらい花や。どうか長く、咲いてください。